

戦火をくぐりぬけた銅原版

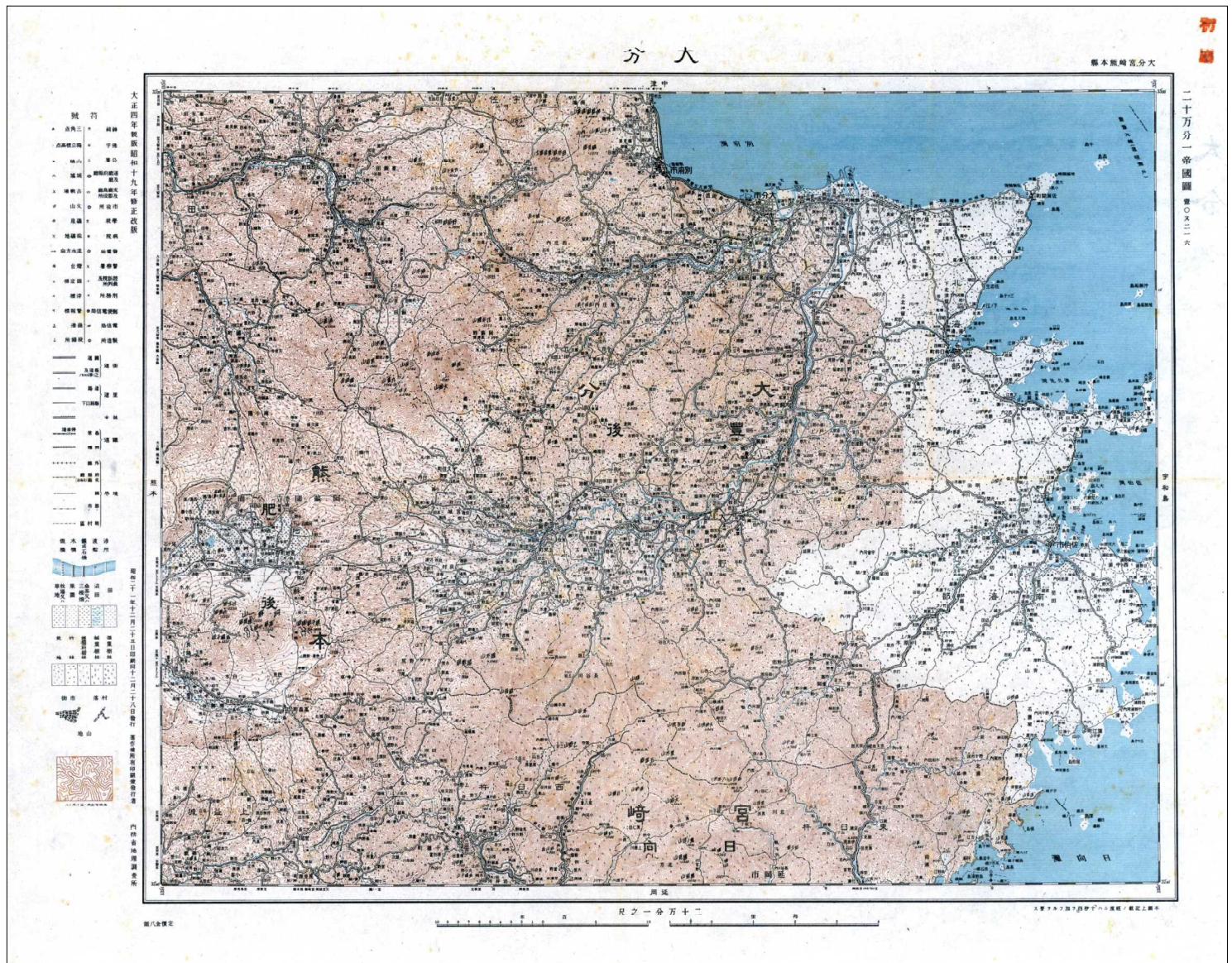
戦火を避けるため原版類の疎開も行われました。20万分1帝国図の銅原版も、梱包するために多摩川べりの倉庫から三宅坂庁舎の印刷工場に移され、廊下に並べられていましたが、昭和20年5月24日夜から25日にかけての空襲で庁舎とともにそのほとんどが焼失してしまいました。

焼失をまぬがれたのは、わずかに「名古屋」・「京都及大阪」・「岡山及丸亀」・「小倉(現：福岡)」・「大分」の5図葉だけでした。このうち「大分」は、くんせん(陰影)版を含む5色5枚が国土地理院にそろって残されています。他の図葉については、東京国立博物館に一部存在するものの、それ以外についての行方は不明です。

国土地理院には、20万分1以外では「5千分1東京中部(皇城)」、2万5千分1地形図や5万分1地形図など約120枚の銅原版が保存されています。



陸地測量部の焼跡
(1947年11月 米軍撮影)



20万分1帝国図「大分」 昭和19年修正改版 昭和21年12月28日発行(拡大複製)

この図は、焼け残った銅原版から戦後に再販されたものです。くんせん(陰影)は利用されていません。豊後水道に面した大分県沿岸地域は要塞地帯に指定されていたため、戦時改描で、等高線が銅原版の「曲線版」上で削除されていますが、戦後復興に資するため急急にそのまま印刷されています。

焼却処分から救われた成果

■重要書類の焼却命令

日本政府と軍はポツダム宣言の受諾を決定した後、ただちに、関係省庁や軍のすべての機関に対して、重要書類の焼却を通達していました。陸軍では8月15日付で参謀総長名の「陸軍秘密書類焼却二関スル件」が通達され、陸地測量部においては玉音放送終了後、疎開先の波田国民学校や梓国民学校の校庭に防空壕用に掘った穴の中で地図類を次々と燃やしていきました。

■突然の焼却作業変更命令

地図類が燃やされていくのを目の当たりにした渡邊参謀は、「日本の復興のため将来必要となる地図まで焼却することはない」と考え、「陸地測量部処理要綱案」の具申とともに、「地図の保存」を進言しました。8月19日、焼却の変更命令となる「情勢の転変二伴フ作戦用地図処理要領ノ件通牒」が出され、残すものは残すということになりました。本土決戦用の地図など優先的に燃やされたためほとんど残らなかったものもありますが、陸地測量部にあった少なくない測量成果や地図類といった貴重な資料が失われることは避けられました。

陸地測量部、民間印刷会社に対する具体的な指示

【陸地測量部】

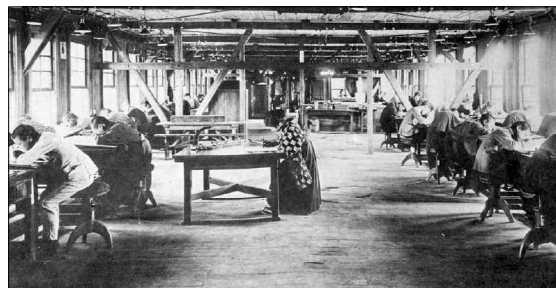
- イ. 原図、初刷、三角点成果表は成るべく保管す
- ロ. 原版はそのまま残置す 但し軍事秘密たる2万、1万、5千分1のものは焼却または破壊す
- ハ. 印刷機、資材等は残置す 但し一部の「レンズ」は保管す
- ニ. 資材のうち所要なものは職員に貸与支給す

【民間印刷会社】

民間印刷会社において印刷せる5万分1地形図及20万分1帝国図は印刷会社に貸与す
用紙、薬品、亜鉛板等は陸測主任者と経理上の協議（例えば印刷費を当該資材にて現品払いするが如き）の上印刷会社に交付す

■陸地測量部の製図・製版・印刷作業風景

出典：陸地測量部写真帳



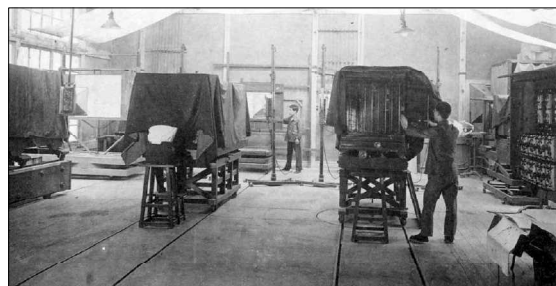
清絵作業



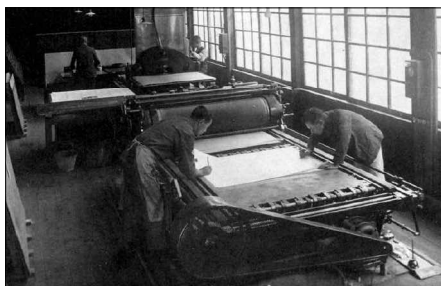
銅版彫刻作業



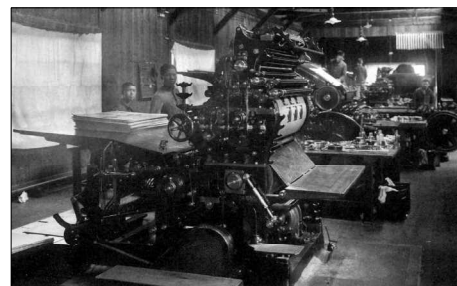
亜鉛版製版作業



湿版写真撮影作業



オフセット製版機による校正刷り作業



オフセット輪転機による印刷作業

地図の複製再販

地理調査所は、戦後復興のため空襲による焼失や終戦時の焼却処分で失われた地図の複製や、戦時中に一般販売を中止していた地図の再販を開始しました。まず、20万分1図が発行され、続いて昭和23年からは5万分1地形図の応急修正測量が始まりました。

20万分1図の複製再販

20万分1帝国図は、終戦間際の空襲でほとんどの原版を失ってしまいました。かろうじて焼失を免れた5図葉は銅原版から複製し、終戦直前応急的に修正を行った5図葉(「東京」、「水戸」、「佐倉」、「大多喜」、「横須賀」)は応急修正原図から3色刷りで複製されました。残りは最終試刷からコロタイプ印刷法や写真製版法により1色刷りまたは3色刷りで複製されました。

【コロタイプ印刷】：ゼラチンをガラス板に塗布して乾燥させ、ネガフィルムと密着して露光し、これを版として印刷する方法です。連続階調(グレースケール)に近い表現が得られるので、写真の複製に特に優れており、帝国図のくんせん(陰影)の濃淡も再現されています。複製は、「京都便利堂」の請負印刷作業で行い刊行されました。印刷図には、「**便**」が表示されています。



【写真製版による一色刷り】：コロタイプ印刷は、ガラス原版を使うため印刷費が高額となり、また大量の印刷が困難だったため、写真製版による1色図の複製が行われました。ところが、これも多色図をそのまま1色図としたので、画線の重複による不鮮明さはまぬがれませんでした。このため、写真製版で多色化する方法(最終試刷図を撮影したネガガラス版上で3色に分版する)が考案され、地形のくんせん表現を除いて3色図として刊行されました。

5万分1地形図の応急修正

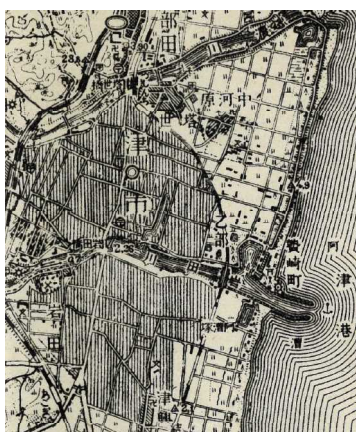
大正時代の終わりに全国整備が完了した5万分1地形図は、「陸測の5万」として長く使用されていましたが、昭和に入り戦時体制が拡大してくると、地図作成の主力は外邦に向けられ、国内の図の修正はほとんど行われませんでした。戦後の復興にともなって、地形図の必要性が高まったため、昭和23年から5年計画で応急修正測量作業が開始されました。作業には、戦後間もなく米軍が撮影した空中写真が使用されました。作成された地形図の中には、戦災の被害にあった都市の被災地域を表示したものもあります。

戦災地を赤色で表示



「四日市(昭和25年応急修正)(部分拡大)」

戦災地を縦ハッチで表示



「津頭部(昭和24年応急修正)(部分拡大)」

焼失した建物密集地を白抜き(空き地)で表示



「大阪東北部(昭和7年要部修正)(部分拡大)」



「大阪東北部(昭和25年応急修正)(部分拡大)」

しゅうせい 輯製20万分1図

明治17年（1884）参謀本部は、伊能図、内務省の地形図・河川図及び各府県庁作成の地図その他を資料として、経度差1度、緯度差40分の区画で、多面体図法による20万分1図の編集に着手しました。明治26年（1893）までに国土の全域（一部の離島を除く）の地図が完成しました。これが、「輯製20万分1図」です。当時この図は、統一した図式により日本全域を描いた最大縮尺の地図でした。

